

觀察のさせ方 (四)

東京女高師附屬
小學校主事 堀

七 藏

一六

既に述べたやうに、幼兒の觀察は幼兒各自ら感覺器官を十分働かして天然物や自然の現象を認識せしむべきものである。決して保姆が幼兒に代つて事物を觀察したり、教師のもつてゐる觀念についての知識を説明するやうなことでない。それで外界の事物から來る刺激によつて幼兒は自然に觀察するものである。この外界からの刺激が幼兒の五官に感覺を起し、幼兒が外界の事物を知覺し認識するのが觀察であるから、保姆は適當な觀察材料を提供し、幼兒の觀察を行はしめるやうにせねばならぬ。觀察の作用は幼兒のなすところであるが、觀察するやうな機會をつくり、觀察の材料を提供することは保姆の任務である。勿論保姆が特別に觀察の材料を提供せずとも、幼兒の環境にある森羅萬

象は絶えずいろ／＼の刺激を與へて幼兒の視聽に訴へてゐる。それで幼兒はぼんやり遊んでゐるやうでも、絶えずその五官を鋭敏に働かして、外界を絶えず觀察してゐる。所謂知らず／＼の間に、いろ／＼の事物を觀察し、それについての觀念を得てゐる。即ち無意識的の觀察は二六時中めざめてゐる間は、絶えず行はれてゐる。しかしこの無意識的觀察の結果は多くは明白を缺き、精確でないものである。吾々大人でも屢々見てゐるものが、さてきかれて見ると、明白でないといふことが甚だ多い。例へば誰でも牛はよく見て知つてゐる。牛に四本の脚があるとか、角があるとかまた牛は馬と大變違つてゐるとかいふことは皆よく知つてゐる。四歳五歳の幼兒でも牛を観たことのあるものは、誰でも牛をよく知つてゐる。牛の觀念は繪では得られないが牛の實物を観るとはつきりするものである。しかし屢々牛

を觀てゐるにもかゝらず、「牛の角と耳と目とがどんな關係にあるか」と、尋ねられると、明白に答へられるものは誠に稀である。「牛の角がどんなに曲つてゐるか」と、尋ねられても矢張り明白に答へられないのが普通である。

「牛の眼は馬の眼とどんなにちがふか」と、尋ねられると只「牛の眼はこはい」といふ一般的な認識は誰でも出來てゐるが、さて「どこがどんなになつてゐるから恐ろしいのか」は全く分らないものである。また犬の脚が猫の脚のやうに四本あることは、三四歳の幼兒でも知つてゐるが「犬の脚の趾が幾本あるか」といつたならば、大抵の人は知らない。「有るだけ有る」といふ答は誰にでも出來るが「幾本あるか」といへば誰も答へられない。そんなことさへも答へられないとは、吾々の無意識的な觀察がいかにあはれなものかと、つくづくいやになる位である。犬の脚は觀てゐる。趾のあることも觀てゐる。しかしその趾が前脚と後脚と同じ數であるか否かさへ分らない。いや分らないのではない、知らないのである。それは犬の脚の趾を氣をつけて數へて見ないからである。「そんなことを數へて何の

ためになるか」といへばそれまである。功利的な大人の見地からすれば、犬の脚の趾は四本でも五本でも天下の大勢に關する問題ではない。けれども犬にとつて「趾が四本か五本か、前脚と後脚と同じか違ふか、また趾がどんなになつてゐるか、爪が猫の脚とどうちがふか」などは重大の事項であり、犬の研究には重要な點である。犬が猫のやうにうまく樹にのぼることが出來ないで、猿と喧嘩したときでも、猫を追かけて樹にのぼられたときでも、所謂手の施しやうがない。いや脚の施しやうのないのも、全く脚の趾の問題である。これは多少横道にそれたやうであるが、兎に角吾々はよく觀て知つてゐるやうな、何でもないやうな事柄でも、さて注意するとぼんやりしたことのみであるには驚かざるを得ないのである。故に觀察に於て、單に外界からの刺戟に應じて無意識的な觀察が行はれるだけに止めないで、幼兒がすゝんで、觀察するやうに仕向けねばならぬ。それには成るべく強く幼兒の感覺を刺戟するやうな、幼兒の注意をひくやうな、刺戟の強い生物を選択して觀察させるやうにせねばならぬことは勿論である。あまり小さ

な物は勿論、あまり大きなものも、肉眼では、観察出来ない。案外小さな物でも幼児は注意して観ることがあるが、一般に細かな物は刺戟が弱いので観察しないのが普通である。あまり大きな地球は、誰もその全體を観ることが出来ぬ。それで幼児に観察させるものは適當の大きさであり、適當な光で眼を刺戟するものでなくてはならぬ。また活動するものが幼児の視聽をひくことが多い。靜止せるものより活動するもの、植物よりも動物、死んだものより生きてゐるものを好んで幼児は観察するものである。しかし活動するもの、絶えず變化するものは観察が困難である。従つて観察が不明瞭なことが多い。兎に角、幼児に明白な観察を行はしめるには、必ず幼児の注意をひくやうな材料を選択せねばならぬ。

二

適當な刺戟と與ふるもので、幼児の注意をひくやうな觀察の材料を選ぶことが肝要であると共に、幼児をして單に無意識的な觀察を行はしめるに止まらず、成るべく意識的

な觀察を行ふやうに仕向けることが保姆の任務である。無意識的な觀察は誰でもするもので、特に觀察をさせるといふのは意識的な觀察を行はせることを意味するのである。

そこで意識的な觀察をさせるにはどうすればよいかといふに、單に幼児を自然の儘に放任してはいけぬ。外界からの刺戟に應じて幼児が觀察するだけに止めて置くのでは足りない。幼児が進んで事物を觀察するやうに、幼児の注意を觀察せんとする事物に向けさせねばならぬ。その方法はどうすることか。第一は觀察點を指示するにある。觀察點を指示するといつても、觀察の結果、明白となるべきことを説明することではない。「どんなになつてゐるか」「いくつあるか」「どれが長いか」「形はどんなになつてゐるか」「色はどんなになつてゐるか」など、いろいろ觀察すべき點を疑問の形で幼児に尋ねて、その疑問を幼児が自ら解決するため觀察するといふやうにせねばならぬ。「こんなになつてゐませう」「色は赤ですな」「圓いでせう」といふやうに、觀察の結果を指示するが如きことは禁物である。どうしても觀察せねばならぬやうに、觀察點か疑問

の形で提出するときは、凡ての幼児は必ずその間に應じて観察するに相違ない。「サアよく観なさい」と、強要するよりも、「どんなになつてゐますか」と、問ふだけで十分である。幼児は問はれて観察し、観察すると好奇心を起し更によく観察するといふ場合で、次から次と注意して観察するものである。かくて、明白な觀念を收得するものである。それで観察をさせるには必ず観察點を疑問の形で指示することが肝要である。

同じく疑問の形で観察點を指示し、よく観察させるにしても、事物は二つ比較する方がその事物を一層明白に観察するものである。似寄つたものを二つ並べて比較させる。「どれが大きいか、小さいか」「どれが赤いか」「どれが圓いか」「どれが長いか」「どれが短いか」「どれが甘いか」「どれが奇麗か」「どれがすきか」といふやうに、いろ／＼と數量でも性質でも、比較させるのである。そしてその相異なる點を明白に認識させることが肝要である。

幼稚園時代の幼児では専ら相異點を比較させることである。比較して類似點を抽象することは遙かに高尚な精神作用であるから、幼児には要求出来ない。「林檎と蜜柑とど

こがちがふか」實物について比較させると、満六歳児では明白に三つの相異を列舉出来るのが普通である。「色がちがふ」「味がちがふ」「皮がちがふ」といふやうに、相異點を三つ上げることが出来る。尚ほ満六歳の幼児は、「色がどうちがふ」「味がどうちがふ」といふやうに、相異する點の相異を明白に上げることが出来る。そして幼児によつて視覺型のものがあり、味覺型のものがあり、いろ／＼あるし、同じ視覺型でも、色の方に先づ注意するもの、形に注意するもの等、いろ／＼ある。また實物の比較のみならず、觀念で比較することも出来るのである。しかし林檎と蜜柑との類似點は大人でも三つ列舉することが時には困難な位である。兎に角觀察では實物について相異點を比較させることが肝要である。更に實物と觀念とを比較させ、實物と繪とを比較させることもよい。その場合には、「この繪が實物とどこがちがつてゐるか」といふ風に、比較させてもよいのである。

尚ほ注意して觀察させる方便として寫生させることがある。幼稚園時代の幼児では、寫生といつてもなかく容易ではないが、寫生せんとすればよく觀察するものであ

る。よく観察させるために、本當に寫生することが出来なくとも、實物を寫生させる方がよいのである。寫生しようとしてよく観察するからである。これは大人でも子供でも同様である。大人でも或る人の顔を寫生して見ようと欲するときは、眼がどんなであるか、鼻がどんなであるか、また目はどんなか、更に眉でも、頭髮をどんなに分けてゐるか、眼鏡をかけてゐるか、また顔の輪廓や格恰はどんなであるか、或は顔の特徴はどこにあるか、色はどんなであるか、など、いろ／＼細かな點を注意して観察するものである。観察したことを一々表現する技量をもたなくとも、寫生しようと欲すれば大變こまかなところまで觀察するものである。幼兒の繪には、頭から手が出たり、足が出てゐるし、顔は横向きで、胸が正面といふやうに幼兒特有の表現がある。けれども幼兒として決して頭から手足が出てゐるとは觀察してゐない。何時でも顔が横向になつてゐるとも觀察してゐない。只特徴をつかんで、幼兒特有の表現をなすものである。その表現から幼兒の觀察が誤つてゐるとは斷定してはならぬ。

兎に角、幼兒をしてよく觀察させる一方法として、「よ

く觀たところをお書きなさい」と、觀察の方便として寫生させることはまことに適切である。また幼兒の繪と實物とを比較させることも、また大人の繪と幼兒の繪とを比較させることも大變よい方法である。

凡て實物のみならず、繪でも之を觀させるときには疑問の形で一々尋ねるか、話させるか、畫に描かせるか等の表現をさせることが肝要である。この點からして觀察と談話觀察と手技觀察と唱歌觀察と遊戲などと、十分連絡することが肝要である。發表し表現するためによく觀察し、觀察したところを發表し、表現すると確定となるものである。例へば龜の歩き方は繪でも口でも表現することが出来ないから、幼兒に動作を以て表現させるがよい。殊に動物の運動法などは、成るべく口にするよりも、畫でよりも、寧ろ動作で表現させるがよいのである。繪をかく爲めによく觀察するやうに、動作で眞似せんとするために、一層よく觀察するといふのが實際である。この點からして、觀察と動作、作業で表現することは至極大切である。

更に事物をよく觀察させるに當つて、さがしつゝをさせるがよいのである。一番大きなどんぐりを拾つたものは誰

か、大きな葉、小さな葉、長い葉、短い葉、圓い葉、ぎざぎざの多い葉、うすい葉、すべくする葉、さらさらした葉、厚い葉などと條件を與へてその條件になつた葉をとつたものは誰かといふやうに競争させるのである。果物でも花でもまた小石でも、金屬でも幼兒をしてさがしつこをさせ、それをくらべさせるとよい。また名稱のあてつこを行はせるもよい。兎に角、動物は殺したり、踏みにつたりさせずして、成るべく多くつかまへさせたり、植物は無暗に千切るのとはよくないが、いろいろのものを採集させるといふやうな競争的作業は大變面白い遊びであり、よい觀察になるのである。

三

この間、關西の或る幼稚園の方から質問があつた。「幼兒を郊外に連れ出すことは大變よいと思つて實行してゐるが、どうも何時も同じ所に行くとお觀察させるものがなくなつて困る。どうすればよいか」といふ質問である。この質問は一才考へると、同じ所に毎週に一回、毎月回数回行くと、觀察するものがなくなる。最初二三回は小山もあり

丘もあり、小川もあり、池もありするから、觀るべきものがあるけれども、五回も六回も、また十回二十回と行けばどうも觀察させるものがなくなるとは誰でも考へる所である。幼兒も初め一二回は珍らしがるが、數回になるとまたかと思ふに相違ないので困るのであらう。しかし外界からの刺激に應じて、單なる無意識的な觀察だけ行はせるならば、一二回出かけると種子がつかまるかも知れない。けれども若し保姆の方で、もつと廣く自然物自然現象に注意して觀察させる態度に出るならば、年々歳々さく花でも決して同じではない。先週觀たものがどんなに變化してゐるか、前回に觀つてなかつたものを見付けるといふ工合で、毎回いろいろのものを觀察することが出来るのである。自然は瞬時も靜止してゐない、絶えず變化してゐる、この變化に着眼して、幼兒に意識的の觀察を行はせるならば、同じ所に二十回出かけても、また三十回出かけても毎回それ／＼新しき觀察をなし、だん／＼精細な觀察をさせることが出来る、面白い遊びや作業を行はせることが出来る。會つて私には校庭の小さな築山に於て、尋常小學第一學年兒童の觀察を一學期に亘つて行はせたことがある。それでも兒童はま

だ觀察出來ない材料が澤山あつたのである。觀察に於て、いろ／＼のことを教師が説明せんとすれば、幼兒や兒童の理解し得る程度に際限があるから、直に種子がつき、材料の欠乏を來すものである。しかし一ヶ所にある自然物自然

現象を幼兒や兒童が觀察し、作業するならば、中々盡くる所がない。朝顔の花でも、蕾の觀察、花の觀察、花の萎れたところ、果實の成長するところ、熟するところ、葉の形、大きさ、粗略の度、莖の有様等と、同じ朝顔同志を比較させたり、他の植物とくらべたりすると、五時間でも六時間でも幼兒の觀察する材料が盡きないものである。朝顔の花や葉、蕾などを繪に畫いたり、切抜いたり粘土細工でつくつたり、いろ／＼すればまことに面白い作業が出来るのである。それは觀察ではない、手技であるといふ方があるかも知れない。假りにそれが手技でも差支ない。保育項目として強ひて區別せねばならぬことは毛頭ない。幼稚園令施行規則第三條には「幼稚園の保育項目は遊戯、唱歌、觀察、談話手技等とす」とあるだけである。是等を區別せねばならぬとも、また何を材料とせねばならぬとも、決して要求してないのである。只第一條に、「幼兒の保育は其の心身

發達の程度に副はしむべく、其の會得し難き事項を授け、又は過度の業を爲さしむることを得ず」とあるだけで、幼兒に出来るだけのことを觀察させ、手技をさせるに、何等の不都合もないのである。

小學校の理科では理科書があり、理科教材が文部省で大體示してあるやうに、幼稚園の保育項目でも、それ／＼その内容を指示して欲しい。殊に觀察は新に保育項目として加はつたのであるから、何を觀察させたらよいか分らぬ。どうか觀察の材料を明白に指示して欲しいなどと注文する方がある。これは誠に愚な話である。保姆の自由に材料を選択することを許容してあるのに、わざ／＼之を規定してその自由選擇を束縛して欲しいと注文するやうなものである。また幼兒の生活環境の異なるに從つて、自由に觀察し得る材料を觀察させることが肝要である。幼稚園時代から何と何とを觀察させねばならぬとか、何種の實驗をさせねば保育が出來ないとか、觀察の目的を達することが出來ないとかいふものではない。幼兒の生活内容に入り來る自然物でも、自然現象でも、また人事上の事柄でも、その事物が危険を招來しない限り、また悪事とならない限りは、ど

れでも幼児の興味に任かせ、その欲する所に随ひ、好奇心の働くまに、観察させ、實驗させ、作業させてよいのである。只その間に強いて材料選擇の條件を列擧するならば、教育的價値の多いものであること、幼児の興味を有するものたること、幼児の程度に適するものたること等が考量せられねばならぬ。それも皆な比較的のものであるから、幼兒の生活内容となるものならば十分である。幼兒が生活することによつて、その生活に必要な知能を啓發せられるのであるから、寧ろ幼兒の生活内容となる材料を利用せねばならぬ。まゝごと遊でも、八百屋ごつこでも、幼兒の遊びの間に觀察も談話も、亦手技も、更に唱歌でも遊戲でも折込まるべきものである。幼兒が楽しく共同的な遊びをなす間に、いろ／＼幼兒がその生活に必須なる知能が次第に啓發せられるものである。この點から大人が理科の實驗などを無理に兒童に行はしめんとしたり、またいろ／＼の理科的説明をなしたり、理科の知識や理窟を理解せんとすることは愚も亦甚だしいものといはねばならぬ。例へば幼兒にシャボン玉の實驗をさせることを觀察の材料となすことは、あまり感心出來ない。シャボン玉を吹く遊びは、幼兒

には至極く面白いことで觀察の一事項として、シャボン玉吹き遊びを加へることは大賛成である。しかしシャボン玉をつくるにはどんなにするとか、シャボン玉はどうして大きくなるか、シャボン玉はどうして五色に見えるか、シャボン玉はどうして飛ぶか、などの理窟を説明するのは以ての外である。假りにこんな理窟を説明しても、幼兒に分るものではない、また保母がシャボン玉を吹いて、幼兒に觀察させるのもよくない。シャボン液をつくることも幼兒にさせるとよい。假りにそれまで幼兒にさせなくとも、シャボン液を幼兒に與へて、いろ／＼にシャボン玉を吹かせる遊びとせねばならぬ。幼兒がいろ／＼吹いてゐる間に、大きな玉となつたり、高くとんだり、赤くなつたり青くなつたり、色々と變化することを幼兒はまことに興味を以て觀察するものである。故に幼兒にはシャボン玉を吹く遊びで、決してシャボン玉の實驗ではない。こんな譯であるから、堅苦しい理科の實驗などを考へず、成るべく幼兒が愉快な遊びをしてゐる間に、いろ／＼の事物現象を意識的に觀察させるやうに、材料を選擇排列することは誠に望ましいことである。